

# C・ロジャーズから読み解く 私が受けたケアマネさんの支援を



執筆 ▶ 葉山 靖明 ● (株)ケアプラネット  
「デイサービスけやき通り」代表取締役

前回までの計3回において、私が大変お世話になったケアマネさんとの思い出について書かせていただきました。私は、「この方の支援は何だったのだろう？」とずっと考えながら10年を過ごしました。そのケアマネさんのことをすべて理論的に書くことは、私には知識不足ですし、ケアマネさんの「恩」とか「優しさ」を含め、すべてを知識で分析することは、とても失礼だと私は認識しています。

だから、今回はそのケアマネさんに当てはまる！と感じた「クライアント中心療法」で有名な心理学者カール・ロジャーズの「態度条件」を借りて振り返り、読者の皆様と共有できればと思い、書きます。

## 1. 条件を付けずに受容すること

「受容」という言葉は“患者が障害を受容”という具合に使われることが多いと思いますが、ここでは、「治療者が受容」するという、立場が逆の話を書きます。

C・ロジャーズはこう書いています。①「カウンセラーはクライアントを、条件を付けずに受容すること」、②「クライアントのどの側面にも偏りなく積極的、かつ肯定的な関心を向けること」、そして、③「それらはたとえ矛盾があってもクライアントのかけがえのない側面として大切に受けとめてゆく」。

介護保険を受けるくらい心身の状態が悪い人は、自信を喪失し、体力も衰

え、活力も低下し、自己に対し肯定的な判断などできるはずもなく、否定的で、悲観的になるというのが、普通でしょう。そういうときに会うケアマネさんはとても重要な人物で、そのケアマネさんが、①②③のスタンスであったなら、クライアントは自分の辛さ、信念を語り始めることができると思います。

私のケアマネさんとの出会いのシーン（5月号）、何でも話せて何でも聞いてくれるシーン（6月号）はまさしく、この①②③であったと思います。

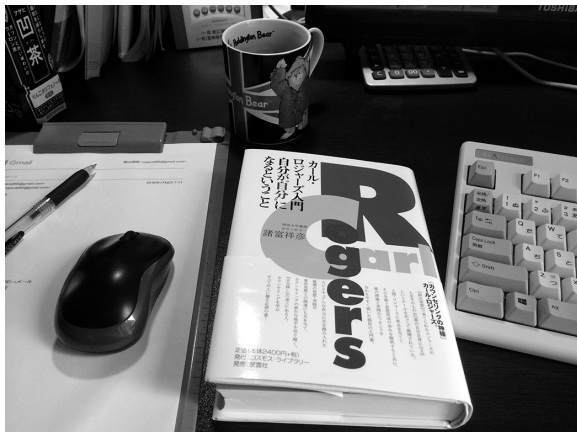
一般に言う「その人らしく」というポジティブな願いの前に、ケアマネさんだけでも受容してもらえるのなら、大切なことを語り始めるきっかけとしては、とても大きいと思います。これは面接やアセスメントで質問をする場面で、良い関係、良い環境になると思います。

## 2. 共感的理解の大切さ

④「クライアントの私的な世界を、その微妙なニュアンスに至るまで、あたかも彼自身であるかのように感じ取り、（中略）ていねいに相手に伝え返してゆくこと」。

私のケアマネさんは、確かに私の世界にグッと入ってきてくれました。教壇に戻ろうとしてうまくいかなかった復職シーン（6月号）や、鹿児島まで私の講演レビューを聞きに来てくれたシーン（7月号）はそうかもしれません。④の「伝え返してゆくこと」もしっかり語り、行ってくれました。そして、「あたかも」の表現

葉山 靖明 はやま やすあき  
1965年福岡県生まれの51歳。専門学校で法人税法及び簿記論の講師を務めていた2006年、40歳のときに左脳の脳内出血発症し右片まひに。翌年それまでの職場を辞して(株)ケアプラネット設立。現在は、デイサービス経営のかたわら講義・講演活動を継続中。社会福祉法人「夢のみずうみ村」役員。人間科学修士



引用した『カール・ロジャース入門』。ロジャースは、私がとても尊敬する心理学者です

通り、必要以上に感情的にならずに、適度な距離を置いていてくれました。「鹿児島まで自費で行ったのは黒豚を食べたかったから」と冗談を連発するシーンなどが、感情の深みに入らずに、私の客観性を保たせる環境因子になるのだと思います。

態度条件の3つ目は、「純粹性」の話ですが、あえて、私が伝えたい「関係の質」を次に書きます。

### 3. 関係の質

⑤「クライアントを正確に診断（評価）しようとそれに固執しすぎると、クライアントを防衛的にさせてしまい、肝心の『関係の質』そのものを破壊してしまうことがある」。

これについては、私のケアマネさんから、全く破壊されたことはありません。

しかし、この10年で破壊された経験

は、数えきれないほどあります。アセスメント・プランニングへの意欲が高いばかりに、固執し、いわゆる「根掘り葉掘り」に質問されたりした経験は少なくありません。「聴く」「答える」「記録する」といった面接の機能的な部分のみを重視しすぎるケアマネさんはさすがに少ないとは思いますが、医療・福祉業界全体を眺望すれば、少なくはないのかもしれない。



### しかもこれは入口にすぎない

私のような者が、ケアマネさんの接遇・面接、態度等について述べるのはおこがましいのですが、生活や人生の立て直しを望む患者・利用者との関係においては、この3つの「態度」の条

件、そして上記①～⑤は経験上、最低限必要だと思えます。いくら立派なチェックリスト、立派なマネジメントツールがあっても、「態度」で心的距離が近づかないようであれば、もしくは「態度」で心的距離が離れて疎遠な関係になるのでは意味がないと思えます。リハビリスタッフも同様でしょう。

さらに、この態度条件は対人支援のいわば「入口（いりぐち）」の問題であって、これ以外の、人生を支えるといった根幹部分が医療・福祉の本題なので、介護保険のケアマネジャーの仕事は本当に大変なのだ、とあらためて感じます。

#### 引用文献

諸富祥彦著『カール・ロジャース入門——自分が自分になるということ』（コスモライブラリー、1997年）

## 今月の私

## NPO法人「学びあい」が誕生！



大分県から承認書を受け取った理事長の羽野等氏（左）と副理事長の私

**私** たちカタマヒなどの障がい体験者11人と作業療法士ら専門職11人が集い、私たちの障がい体験を社会に活かすために、6月22日に大分県に本社を置くNPO法人が設立されました！私は福岡及び日本全国担当者です。

このNPOは、①「体験を活かした講義」リハビリ体験や障がい体験による講義、②「研修イベント企画」片手の料理教室等の研修を協働企画、③「協働研究」リハビリテーション等の研究を協働で行うという組織です。

もうすでに専門学校やイベント企画のご依頼をいただいています。7月末に設立記念合宿が行われますが、それが終わればこの紙面でも、介護保険卒業生らの社会活動として報告できると思います。

乞うご期待！